

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320080

研究課題名（和文）

ベトナム語・日本語電子辞書の構築に関する研究

研究課題名（英文）

A Study on the compilation for Vietnamese-Japanese electronic dictionary

研究代表者

富田 健次 (TOMITA KENJI)

大阪大学・世界言語研究センター・教授

研究者番号：60116142

研究成果の概要(和文)：日本・ベトナムの言語学者・外国語教育者・情報技術研究者の知恵を総集して、日本語とベトナム語の間で相互参照可能な電子辞書を開発するための基礎研究と位置付けた研究であったが、研究代表者が長年集積してきた各種データを整理・発展させ、内外のコンテンツの電子化を計り、コーパスやレキシコン類の入手も終え、本格的辞書編纂作業の基盤が確立したものと考える。各語彙に必須の用例についての研究も一応の成果を得た。

研究成果の概要（英文）：This study was the basic study to concentrate the knowledges of some linguists, foreign language teachers and researchers of information engineering in Japan and Vietnam in order to develop an electronic dictionary available to refer each other between Japanese and Vietnamese. We think now we have succeeded to establish the base for a full-scale Vietnamese-Japanese electronic dictionary with the data full arranged and developed which the representative of this project had collected for a pretty long time, some electronic contents inside Japan and out, kinds of corpuses and lexicons so on. And we are sure that we also obtained the results of the study on collecting actual examples necessary for each vocabulary.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2009年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
総計	7,700,000	2,310,000	10,010,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ベトナム語、外国語教育、電子辞書、漢越語、文法情報

1. 研究開始当初の背景

日本とアジア諸国間の交流が活発化する中、特に日本・ベトナム間の経済、文化、学術面における交流の機会が増加の一途を辿っている。例えば、ベトナムにおける日本語学習者人口の増加を見ても、2003年の時点ですでに1万8千人に達しており(国際交流基金、海外日本語教育機関調査)、以後の増加もその現状を端的に示している。一方日本国内においては、在日ベトナム人の数が2万8千人を超える中(外務

省 2006 年末調査)、司法、医療等様々な分野で日本語・ベトナム語間の言語交渉の場面が急激に増加しつつある。

言うまでもなくそこで最も必要とされることは、優れた通訳・翻訳者あるいは直接当該言語を学ぼうとする人的資源の養成と同時に、彼等の言語習得を支援する工具類の構築作業である。一般に2言語間の言語的交渉を支援する工具と位置づけられるものとして辞書、文法書、及び学習書が挙げられるが、昨今の辞書学(lexicography)の発展に伴い、従来文法書に

記載されてきた情報の多くが辞書に掲載されるケースが増えている。結果、学習目標言語を見出し項目とする辞書でさえ、当該言語を理解するための工具(聞いて読むための辞書)という位置づけから当該言語による情報発信を支援するための工具(書いて話すための辞書)としての色合いが強くなりつつある。

2. 研究の目的

上述の背景の下、本研究課題は、従来の研究蓄積の基礎の上に、聞いて読むためのベトナム語・日本語辞書を発展させ、書いて話すための同辞書の開発を目指すものである。ここに言う「書いて話すための辞書」とは、例えば英語学習者向け *Advanced Learner's English Dictionary (Collins Cobuild, 5Rev Ed, 2006)*に見られるような、当該語彙の語彙的意味に加えて、文法情報等実用面での用法に関する情報を含む辞書を指す。加えて、誤用例等否定的根拠(negative evidence)に基づく日本人学習者にとって特に有用と思われる付加的情報を適宜示すことにより、作文用工具としての位置づけを明確化する。最終的には開発されたコンテンツの電子化を施し、語彙検索そのものの便宜に加え、関連語彙の相互参照等が可能な仕様を目指す。

ベトナム語・日本語の翻訳・通訳、並びにベトナム語学習のために一般によく利用される辞書として、越(ベトナム語)・日、日・越辞書、越・英、英・越辞書、及び越・越辞書が挙げられる。まず、特に日本人学習者の使用頻度が最も高いと考えられる越・日辞書の現状を見ると、1980年代に出版されたものが出版以来内容の更新がなされていないにもかかわらず、他の選択肢の不在により依然広い利用者層を占めているのが現状である。当該辞書の特長は、漢語起源語彙の中でも体系的に借用された漢字音により形成される語彙層(いわゆる漢越語)に対して該当する漢字が併記されている点であり、共通言語財である漢語を日常的に使用する日本人学習者にとっては有用である。一方、意味の定義にしばしば誤りが含まれることに加え、例文の類が非常に少ないという欠点が指摘できる。見出し語彙にも若干の偏りが見られ、古語と現代語が注記なしに混在して配列されている点等も改善の余地がある。次いで、越・英辞書の類は、語彙数、意味の定義、その他の情報に関して、上記越・日辞書より優れたものが多々出版されており有用である。中には70年代に出版されたものに、意味の定義、特定の名詞と共に起する類別詞、動詞と補語の間に生起する介詞(前置詞)に関する情報の記載等比較的優れた内容を誇るものがある。最後に越・越辞書の類に関しては、在ベトナム言語学院による国語辞典の類がほぼ毎年改訂されており、語義、語数に加え、実用的な例文が記載される点、日本人翻訳・通訳者、中級以

上のベトナム語学習者にとって有用である。また、社会言語学者の主編にかかる別系統の大辞典が存在し、語彙数の面で様々な分野の用語を収録する点が注目される。さらに2007年に在ハノイ辞書学センターにより編纂された辞書には、上記越・日辞書と同様、漢越語に対し漢字が併記されており、日本人利用者にとって有用な辞書の一つと位置づけられる。ただ、例文の実用性に関しては若干の問題を残している。

これらの辞書の欠点を踏まえた上で、その利点をまとめると以下になるだろう。(1)日本人利用者にとっては、漢語起源語彙に対し漢字を併記することが望ましい。(2)意味定義においては、ベトナム本国で出版された国語辞典の類が現状では最も優れており参考になる。(3)実用に耐えうる優れた例文を記載することが重要である。これらを一般化するとすれば、(1)の示唆することは、語源に関する情報の重要性である。語義の理解あるいは習得においては、往々にしてその語源に関する情報が有用であり、特にベトナム語の主要語彙クラスを成す借用語である漢語は、東アジア諸国の利用者にとって、母語の正の転移を促す言語財として充実させるべき重要な要素である。一方、言うまでもなく当該言語の理解において(2)の情報がその辞書の根幹をなすものであるが、同時に情報発信のための辞書としての位置づけを考える際、例えば、当該語彙の意味定義を読むことによりある程度の文法的情報(品詞等)も予測されるような内容であることが望ましい。最後に(3)については、優れた有用な例文から利用者が意識的・無意識的に抽出する情報を分析することが重要であり、当該語彙の意味的側面もさることながら、実際には文法的側面に関する手がかりを得るために例文を参照するケースが多いと考えられる。特にベトナム語の場合、名詞の共起要素、動詞の項構造、あるいは品詞に関する情報である。したがって、今回の辞書構築作業においては、特に語源、語義、そして文法に関する情報を充実させることに重点を置く。同時に、当該言語習得の便を図り、否定的根拠(広く見られる誤用)の分析により得られる有用な情報も適宜提供するよう努める。

まず語源に関する情報、特に漢越語に関する情報に関しては、2007年辞書学センター編纂の越・越辞書の記載内容をベースに若干の調整を施しつつ記述する。

次いで、語彙選択並びに語義の記述に関しては、研究代表者がこれまで進めてきた辞書編纂プロジェクトを基礎に、特にベトナム独自の文化的背景に熟知した研究分担者の監督の下、引き続き記述作業を続行する。同時に、文法的側面にも配慮した記述を目指す。書いて話すための辞書という性格上、あらゆる分野の専門用語をふんだんに盛り込んだ百科事典的性格に重

点を置くよりも、語彙数のある程度限定し、使用頻度の高い常用語彙を厳選した上で、それらを多方面から記述するという方針の方を重視する。

上記3要素の内、書いて話すための辞書として、従来の辞書に欠けており今回特に充実させるべき情報は、当該語彙の属性の重要な部分を成す文法に関する情報である。特に動詞を中心とする用言の項構造と、個々の項を成す名詞句の意味的特徴と文法構造を明確に示すことにより、当該言語の実態の多くの部分が母語話者の支援なしで再現できるものと期待されるからである。昨今のコーパス言語学の発展の下、大規模な言語データベースに基づく文法情報の帰納的抽出作業が、在ハノイ辞書学センターの地道な研究の成果により、ベトナム語においても実現可能なレベルに達している。また、研究分担者の参加する慶応義塾大学言語文化研究所主催研究プロジェクト「東南アジア諸言語研究会」における動詞に関する研究の成果の一部を利用することにより、当該部分はより充実したものとなることが期待される。

最後に、日本人利用者にとって特に有用と考えられる、日本語話者特有の誤用を考慮した情報の記述に関しては、研究分担者が科研費研究課題「ベトナム語における漢越語の品詞性に関する共時的・通時的研究」の中で、特に漢語に関して目下誤用分析を進めている。同様の手法で他の対象語彙に関しても分析を進め、辞書に適宜付加的情報として記述することを目指す。

以上により得られた情報を電子媒体に体系的に記述することにより、当該語彙の検索作業に加え、関連語彙との相互参照を可能にするような仕様を目指す。

研究代表者が従来より進める辞書編纂プロジェクトそのものが既に 80 年代出版にかかる越・日辞書からの大きな飛躍を意味するものであるが、本研究課題はそれを更に発展させ、発信型語学学習へ貢献可能な形態の辞書の構築を目指すものである。その際には、ベトナム語同様単音節を基盤とし、孤立型声調言語と位置付けられる中国語の研究成果は大いに参考にすべきである。特に北京大学による『現代漢語語法信息辞典』(2002)の開発方針「人機両用」を念頭に置き、コーパスベースの電子辞書とはいえ、言語情報処理分野での利用を前提とするものではなく、人間が当該言語により情報を発信する際に大いに参考となる。

3. 研究の方法

(1) 要旨

作業手順として、まず従来通りの手法でベト

ナム語彙の選択・記述と編纂・電子化作業を続行し、常用語彙をカバーした段階で、収録語彙を便宜上大きく内容語(実詞)と機能語(虚詞)に分け、常用語彙を対象とした文法情報の記述を施す。従来の手法では、ベトナム語のような孤立型言語における文法情報といえば兎角機能語に注意が払われ、内容語の文法情報としては精々品詞に関する情報が適宜付与されるにとどまった感がある。ここでは特に個々の内容語がその属性の一部として保有する文法情報をできるだけ詳細に分析し記述する。まずは動詞、形容詞を中心とする用言を対象に、個々の語彙の持つ項構造、および各項の文法的・意味的特徴を抽出し、それぞれの構造に対応する例文を作成する。次いで、名詞を中心とする体言に関しては、意味の特徴(共起可能性と意味素性)、句構造(修飾要素、限定要素との共起関係)、他の要素との結び付き(コロケーション情報)などの観点から文法情報を記述する。内容語の記述と同時に、比較的研究蓄積のある機能語に関しては、それら成果を基に用法毎の例文を充実させ、利用の便を図る。一方、日本人利用者にとくに有用と思われる各種誤用例から得られる情報に関しては、別途進行中のプロジェクト成果も利用し、適宜記載する。

(2) 平成20年度

すでに作成された語彙リストに研究代表者の長年に亘る収集にかかる語彙収録カードの内容を入力し、そこから漏れる部分に関しては別途意味記述と例文作成により補充する。その成果と新たに加わる作業との整合性を確保すべく、データ形式を再度調整し、同時に収録語彙数の拡充を図る。

上記作業を通じて収録語彙が常用語彙をカバーすることを確認した上で、主に動詞、形容詞を中心とする用言を対象とした文法情報の記述に着手する。ここに言う常用語彙とは、種々の言語データベースの調査、あるいは類型論的に関係の深い東南アジア諸言語との比較作業(三上直光『ベトナム語基礎語彙集』2003 等)に基づき抽出された千語単位の規模の常用語彙を指す。そこに収録された内容語をまず体言、用言、副詞等に大きく分類し、その中の用言について、項構造、共起しやすい副詞等を中心に分析する。従来の辞書に見られる品詞に関する情報のみの場合、例え当該動詞の自他が区別されており、さらに他動詞と記述されている場合でも、それがいくつの項と共起可能で、個々の項が生起する際に無標識で生起可能なのか、あるいは何らかのクッション(介詞、副動詞等)を介して生起するのかが明確ではなく、結果少ない例文から推測するか、意味の近似する他の語彙か

らの類推を手掛かりに作文せざるをえない。そこで、本研究においては、入手可能な言語データベースを利用して、動詞と共起する項の数と個々の項が生起する際の統語的条件を詳細に調査し定式化すると同時に、個々の項構造に対応する典型的な例文を作成する。その際には、動詞の項として機能する名詞句が当該構造においてどのような特徴(意味素性)を必要とするのかに留意し、必要な場合には付加的情報として記載する。それにより、後述の名詞の意味記述との整合性を図る。形容詞に関しても、共起可能な副詞等に関して調査し記述する。周知の通り、ベトナム語学における品詞分類の問題は統一の見解が最も得にくい問題の一つであるが、ここでは従来ベトナムで出版されてきた国語辞典に採用されたもの等を参照しつつ(Nguyen Thanh Nga, *Vai nhan xet ve viec chu tu loai trong Tu dien tieng Viet*[ベトナム語辞書における品詞の注記について]1997等)、できる限り他の要素との共起可能性を根拠に形式面からの分類を目指し、辞書利用者にとってわかりやすい形で辞書に記載するよう心がける。

他方、後述の体言に属する内容語においても同様であるが、社会言語学的観点からしばしば言及される問題として、個々の語彙の意味が日本語の対応語彙と1対1の対応を成さない場合がある。多くの場合、ベトナム語と日本語におけるカテゴリー化のずれがその原因と予測されるが、当該言語の文化的側面にも密接に関連する部分と言える。このようなケースにおける意味記述は極めて重要であり、関連語彙に関する注記が大きな効力を発揮する部分である。この点に関する記述も「書いて話すための辞書」としては必須要素であり、ベトナム語運用における適切な語彙の選択を支援する重要な部分である。

(3)平成21年度以降

動詞、形容詞を中心とする用言の文法情報の記述に引き続いて、平成21年度以降は名詞、類別詞、数詞等を含む体言の文法情報の記述にも着手する。まずは、動詞を中心に調査した項構造の中で、特に名詞の特性が限定される場合を考慮し、各語彙の持つ素性を必要な範囲で簡潔に記述する。たとえば、ある動詞が要求する項として人間、動物の名詞、場所を表す名詞、時間を表す名詞等特定のグループに限定される場合がしばしばあるが、それぞれの項として生起しうるか否かが明確に判断できるような情報を簡潔に記述する。この作業は名詞類の下位分類作業と位置付けることも可能であるが、抽象的な意味素性の抽出作業であると同時に、例えば時間名詞などのグループの場合、文中で副詞的に振舞うことがあることから、作文者がそれと

はっきり判断できる根拠を示す必要がある。したがって、個々の語彙の文法的側面を既定する上でも有用な分類である。まず必要な分類基準を設定した上で、意味定義に加えて付加的情報として下位分類に関する情報も記載する。

特定の名詞グループと共起する類別詞の類に関しては、大規模なデータベースを利用して帰納的に抽出し、その結果を辞書に反映させる。類別詞の生起条件としては、共起可能な名詞の種類(あるいは逆に特定名詞と共起可能な類別詞)に規定されると同時に、文レベルの談話構造(当該名詞句がフォーカス位置にあるか否か等)によっても生起の有無が規定される場合がある。言うまでもなく、後者は辞書に記述すべき対象を超えた情報であるが、類別詞が生起した形での例文を作成する際には、当該文の情報構造として自然かどうかという問題にも配慮しつつ作例するよう心がける。

特定の体言語彙を修飾する要素として共起しやすい限定形容詞の類に関しても、必要な場合には共起条件(位置関係等)等と共に記述する。特に漢語起源の要素がそれに該当する場合は、通常の形容詞と比べて修飾関係が位置的に逆転する場合がある。もちろん当該現象は、上記の用言に関する文法情報の規定において記述すべき対象であるが、共起しやすい名詞においても適宜言及することが望ましいであろう。その他、限定形容詞に加え、動詞とある種の慣用句を構成する連辞(コロケーション)情報についても、特に日本人学習者にとって有用と判断されるものに関しては、必要に応じて調査の上辞書に記述する。

上述の通り、体言所属語彙の意味記述においても、日本語の対応語彙と1対1の対応を成さないケースが多々あり、日本語1に対しベトナム語多の場合には、それら類義語の使い分けに関する情報を、またベトナム語1に対し日本語多の場合にもその事実について適宜例を示しつつ付加的に解説する。

本研究の主要目的である内容語の文法情報の記述及び辞書への記載がある程度完了した段階で、次いで、機能語に関する従来の記述の再検討を行う。言うまでもなく、従来の手法による辞書編纂作業において、既にここに言う機能語(介詞あるいは前置詞、接続詞、助詞、語気詞等いわゆる「文法語彙」)に関しても、意味の記述が一通り完了しており、例文も作成されているわけであるが、本研究課題の目標である「書いて話すための辞書」を目指す立場から、特に当該形式の使用の場面(文脈)を考慮した作例を心掛ける。また、ある文法範疇(たとえば「使役」)に対し複数の機能語が使用され、学習者が使い分けに戸惑う場合等は、個々の形式の用法上

の差異について注記する。

機能語の記述に際しては、研究代表者による『ベトナム語重要文法語彙用例集』(大阪外国語大学、1984)等の研究成果を踏まえた上で、近年のベトナム語統語論に関する研究成果も再度調査する。それらを基礎に上記の点に配慮しつつ、辞書利用者の作文作業に有効な形で整理し記述していく。言うまでもなく、機能語においては例文の提示が要であるため、個々の用法に関する記述の妥当性も含めて、対応する例文の適切性について海外共同研究員の意見を綿密に検討しつつ作例する。

以上、辞書の核となる部分の見通しが立った段階で、徐々に日本人ベトナム語学習者による作文データの分析に取り掛かり、日本人がベトナム語文を産出する過程で注意を要する項目をいくつか抽出する。誤用分析そのものはあらゆる分野に亘るため、特にここで対象とするものは、上記「研究目的」に掲げた本辞書の備えるべき諸特徴に対応するものに限定する。まずは、語源的情報に関する類であり、特に日本語・ベトナム語間で共通する漢語を語源とするにもかかわらず、意味、用法の差異により誤用が生じた語彙の類を取り上げる。次いで、本辞書の主な記述対象となる各種内容語の文法特徴に関連するものであるが、その情報の不足により生じたと考えられる誤用の類を取り上げる。そして、日本語・ベトナム語間の各種カテゴリー化の差異による語彙選択の誤りから生じたと判断される類のものも対象とする。これら3種類の誤用の分析に基づいて、日本人が特に誤りやすいと判断される部分について、否定的根拠(誤用例)を提示しつつ解説する。特に漢語に関連する誤用に関しては、研究分担者が別途科研費研究課題において分析を始めており、本研究課題にもその成果が適用できる。

4. 研究成果

本研究課題を実施する上で必要とされた資料、設備としては、従来出版されたあらゆる種類の辞書サンプルと各種言語情報を抽出する際の基礎となる言語データベースの類であり、前者に関しては、研究代表者が長年に亘って収集したベトナム語辞書のコレクションに加え、在ハノイ辞書学センターから常時寄贈される新刊辞書の情報が得られることになり、本研究課題を遂行する上では極めて恵まれた環境の造成に成功した。後者のデータベースに関しては、同じく辞書学センターの構築にかかる大規模テキストコーパスが既に利用可能であり、今後も拡充が予定されており、今後の本格的作業の基盤が確立した。

海外共同研究員のうち辞書学センターのスタ

ッフ並びにハノイ国家大学のスタッフに関しては、従来の辞書編纂プロジェクトから引き続き共同研究を遂行しており、今後の協力継続の要請も済んでいる。また、ホーチミン市師範大学語文学部言語学部門とは2007年9月の段階で直接面会し打ち合わせ済みであり、協力の同意を得ている。

研究成果は紙媒体、CD-ROMあるいはウェブを通じて広く一般に公開する予定であったが、異なるプラットフォーム間での汎用性を目指すUnicodeをベースとしたデータ仕様の考案にまだ改善の余地があり果たせていない。

各語彙の内容については、まず機能語に関する従来の記述の再検討を行った。本研究課題の最終目標である「書いて話すための辞書」を目指す立場から、当該形式の使用の場面(文脈)を考慮した作例を蒐集することに腐心した。ある文法範疇(たとえば「使役」)に対し複数の機能語が使用され、学習者が使い分けに戸惑うような場合等は、個々の形式の用法上の差異を客観的に区別した上で注記を施した。研究代表者による『ベトナム語重要文法語彙用例集』(大阪外国語大学、1984)、『ベトナム語の世界ーベトナム語基本文典』(大学書林、2000)等の研究成果を踏まえた上で、語彙項目の下位分類と記述を行った。それらを基礎に上記の点に配慮しつつ、辞書利用者の作文に有効な形で整理するよう努めた。言うまでもなく、機能語においては例文の提示が必須であるため、個々の用法に関する記述の妥当性、対応する例文の適切性について海外共同研究員の意見を常に参照しつつ作例した。

日本人ベトナム語学習者による作文データの綿密な分析により、日本人がベトナム語文を産出する過程で注意を要する項目を抽出することを試みた。まずは語源的情報に関して、特に日本語・ベトナム語間で共通する漢語を語源として、意味、用法の差異により誤用が生じた語彙の類を取り上げた。特に当該言語への同化が激しい単音節の漢語についての誤用に注目した。次いで、本辞書の主要な記述対象である各種内容語の文法特徴に関連するもので、その情報の不足により生じたと考えられる誤用の類を取り上げた。更に、日本語・ベトナム語間の各種カテゴリー化の差異による語彙選択の誤りから生じたと判断される類のものについてもその対象とした。これら3種の誤用の分析に基づいて、日本人が特に誤りやすいと判断される部分について、その否定的根拠(誤用例)の収集と分析に努めて一定の成果を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

① Masaaki Shimizu, Consonant Clusters in

Sino-Vietnamese Lexicon, Papers in Old Chinese and Sino-Tibetan (Meeting of the Linguistic Circle for the Study of Eastern Eurasian Languages), 査読無、17 巻、(2010)、13-20

②清水政明、護城山碑文(1342)欠落部の発見—所収避諱文字と虞韻所屬例外字音—、大阪大学世界言語研究センター論集、査読有、2 巻、(2010)、1-17

③住村欣範、『足る』を知る—サステイナビリティの人間学、持続可能な社会への視点、GLOCOL・RISS(編)、大阪大学、(2010)、査読無、27-34

④住村欣範、農家の屋敷地から見たベトナムにおけるフード・セキュリティの歴史的見取り図、食料と人間の安全保障、上田晶子(編)GLOCOLブックレット 03、グローバルコラボレーションセンター、(2010)、95-105、査読無

⑤住村欣範、食の転換期を迎えたベトナムにおける文理協働型の共同研究の可能性について、多様性・持続:サステイナビリティ学教育の挑戦、GLOCOLブックレット02、グローバルコラボレーションセンター、(2009)、査読無、43-59

⑥住村欣範、ベトナム文化人類学文献解題:日本からの視点、風響社、(2009)、185-86; 195; 221; 227; 235; 256-257; 265; 273; 277; 283; 294 査読無

⑦住村欣範、テト、[新版]東南アジアを知る事典、桃木至朗他(編)、平凡社、(2008)、査読無 288

⑧住村欣範、キン族、[新版]東南アジアを知る事典、桃木至朗他(編)、平凡社、(2008)、査読無、123-24

⑨Sumimura Yoshinori, Population Ageing Nutrition Care and Food Security for Aged People in Rural Vietnam, A Fortieth Anniversary Collection of Essays of Thai Binh Medical University, TMU Press, (2008)、査読無、350-58

[学会発表](計4件)

①住村欣範、SCJ Live ~ベトナムの子どもたちは今、第67回 GLOCOL セミナー / 海外体験型教育企画オフィス(FIELD)グローバル・エキスパート連続講座(4)、2010.12.5、TKP大阪梅田ビジネスセンター9F カンファレンスルーム9B

②SHIMIZU Masaaki, A Phonological Reconstruction of the 15th century Vietnamese Using *Chữ Nôm* 字喃 Materials, 2010 International Conference on Vietnamese and Taiwanese Studies, 2010.10.16-17, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan

③住村欣範、ベトナムにおける「人口の質」と栄養、GLOCOLセミナー /ベトナムにおける「人口の質」と栄養—タイビンとニンビンの取り組みから、大阪大学、2009.12.3

④Sumimura Yoshinori, Population Ageing Nutrition Care and Food Security for Aged People in Rural Vietnam, A Fortieth Anniversary Collection of Essays of Thai Binh Medical University, Vietnam, (2008)

[図書](計4件)

①□清水政明、大阪大学出版会、世界の言語シリーズ4 ベトナム語、(2011)、160 ページ

②住村欣範、大阪大学グローバルコラボレーションセンター、ベトナムにおける栄養と食の安全(GLOCOL BOOKLET)(印刷中)、(2011)

③住村欣範(共著)、大阪大学出版会、「国家と個人の間にある経験:ベトナムにおける戦争の記憶」『グローバル人間学の世界』(印刷中)、(2011)

④清水政明、朝倉書店、「越南漢字音」、「字喃」『漢字キーワード事典』、(2009)、29、332

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富田 健次(TOMITA KENJI)
大阪大学・世界言語研究センター・教授
研究者番号:60116142

(2) 研究分担者

清水 政明(SHIMIZU MASAOKI)
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号:10314262

住村 欣範(SUMIMURA YOSHINORI)
大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・准教授
研究者番号:30332753